

# 川柳より見た近世の旅

山 本 光 正

Travel at Edo period from the viewpoint of Sen-ryu

Mitumasa Yamamoto

## はじめに

近世は多くの人々が旅するようになった時代である。その中にあつて近世庶民の旅は地域共同体からの一時的解放であつた。否それは庶民のみならず、他の階層の人々にとつても同様であつたろう。さらには上に対する批判・不満のガス抜き装置としても作用していたといえよう。

こうした近世の旅の足跡を語るものとして、全国各地に旅日記が数多く残されている。しかしその多くは旅中の諸経費や旅のルートを記したものがほとんどであり、旅の具体的様相を書き留めたものは多いとはいえない。それも後世第三者に読ませること、読まれることを想定したものが多く、旅するものの息吹や楽しさはなかなか伝わってこない。

そこで本稿においては、「川柳」を素材として近世人の旅の様子

を少しでも窺うことができればと考えている。川柳をもとに旅・交通を見たものとして、岡田甫氏の『川柳東海道』<sup>(1)</sup> 上下がある。また社寺参詣を扱ったものとしては安藤幻怪坊氏の『川柳大山みやげ』<sup>(2)</sup> がある。

川柳は周知のごとく、近世庶民の考や感情等々を赤裸々に表現しているといつてよからう。尤その表現には当時の流行や生活、さらに当時の人々にとっては常識として認識されていることが読み込まれているため、その解釈には多くの困難が伴う。まして国文学専攻外のものが川柳を扱おうというのであるから基本的な誤りもあると思うが、御教示戴ければ幸である。

本稿は川柳といっても岩波文庫本の『誹風柳多留』<sup>(3)</sup> にのみ依拠したもので、今後さらに多くの川柳をもとにして旅の実態に少しでも迫ってみたいと考えている。

## 一 近世の旅の概要

近世の旅の概要については既にいくつかの論稿もあり、筆者も旅のコースを中心とした拙稿を発表したことがあるが、本稿の便宜のため、コースを中心に近世の旅の概要を述べておくこととする。

近世の旅といっても現代と異り、単に風光明媚な地を見物に行くとか、趣のある都市を見に行くということはあまりなかった。仕事上の旅、止むを得ざる旅は別として、その名目の大半は信仰の旅―社寺参詣を名目としたものである。

近世の社寺参詣は物見遊山を重視したものと、信仰を重視したものに大別できる。東国を中心としてみると、物見遊山の代表的なものが伊勢参宮といえる。断つておくが物見遊山とはいっても多くの現代人よりも篤い信仰心を持って旅に出た筈である。次に信仰重視の旅としては四国八十八ヶ所の遍路を挙げることができよう。

伊勢参宮や四国遍路は長途の旅であり、誰もが行くというわけにはいかない。しかし人々の旅への憧れは強く、そのエネルギーは地域旅行圏ともいべき小旅行圏を生み出した。多様な地域旅行先には成立年代の問題はあるが、とりあえずそれを無視して簡単に述べてみよう。

旅とまではいかないが、最も手軽なものとして村や地域の中心的な所に四国八十八ヶ所を祀る場合がある。これにより村人や地域の人々は寸時の他出を享受することができた。これを広げたものの代表が新四国八十八ヶ所である。一郡・数郡・一ヶ国・数ヶ国に渡って札所が設けられ、手軽に旅の雰囲気に入るわけである。類似したものには観音霊場巡りをはじめとする数多くの巡礼がある。

ここで江戸を中心とした地域旅行圏をみてみよう。まず伊勢参宮に匹敵するものの一つとして成田参詣を挙げることができる。<sup>(5)</sup> 宗教の面からみれば一方は神・一方は仏で全く別個のものであるが、ここではあくまでも旅を楽しむという観点からである。成田山新勝寺は江戸に限らず関東各地の信仰を集めたが、江戸からは一泊二泊で達することができた。途中船橋には八兵衛と呼ぶ飯盛女がおり、ここで一泊することも多かったのだろう。

成田参詣は信仰と遊びを満足させる手軽な旅行地ではあったが、経済的に、日数的に余裕のある人には成田からさらに先へ旅を楽しむことができた。旅先は香取・鹿島・息栖の三社巡りである。この地域には銚子も控えており、銚子の磯巡り、さらには洗濯女などと称される飯盛旅籠に宿泊することができた。いずれにせよこの地域において旅人は三社に参り、存分に水のある風景を楽しむことができたわけである。日本人に限らぬかもしれぬが―は自然を中心とした風景を楽しむ場合、水は不可欠の条件であったようだ。

一方江戸西方の鎌倉・江の島も手軽な旅行地として繁栄した。時に江の島は弁財天を祀ることから、芸事の上達を願う女性も多く旅をしている。

山岳信仰的なものとしては三峯・大山・富士山・筑波山などがあり、巡礼地としては秩父巡礼や坂東札所巡りなど長途の巡礼地も用意されていた。

右の事例は極めて概括的なものであり、仔細にみれば江戸とはいつでもその地域のニーズに合わせた地域旅行圏が成立していたわけである。

東国における長途の旅として忘れてならないものに、出羽三山参

詣がある。三山への旅は地域にもよるが強い信仰のもとに行われていたようで、場合によっては三山参詣をすませて、やっと男子が一人前の男として認められることもあったと聞いている。

また次に東国人の伊勢参宮ルートについてみてみよう。伊勢参宮をするにあたり、東国特に東北方面の人々の多くは一先江戸を目指してやってくる。東北太平洋岸の人々であれば、その間前述した三社や成田を見物して江戸に入る。江戸からは東海道を往くが、その間も各所を見物している。江戸を出て最初に立寄るのが鎌倉・江の島である。さらに人によつては大山や富士山に登ってしまう場合もある。再び東海道の戻り、次に大半の人々の立寄るのが久能山である。これより余裕のある場合は三保の松原へも足を伸ばしている。

久能山を出て東海道の戻るが、間もなく掛川宿で東海道を離れ、秋葉山へ向うのが一般的であつたらしい。秋葉からは鳳来寺へ向い、御油宿で東海道と合する。これより尾張藩城下町の宮宿へ出、海上七里を船で桑名へ渡るが、ここでも多くの人々はこの順路をとらず、津島社などに参りつつ佐屋へ達し木曾川を舟で下り桑名へ入った。

桑名からは東海道と別れ、目的地の伊勢に達する。しかし伊勢は目的地であると同時に次への出発地でもあった。所によつては伊勢からそのまま在所へ帰らなければならない場合もあったようだが、ほとんどの旅人はさらに旅を続けた。或は熊野、或は西国順礼へと。しかし大半は伊勢より奈良・吉野・高野を経巡つて大阪に至る。大阪からは金毘羅へ向う場合もあった。それでは東国の伊勢参宮者が西国のどの辺りまで行ったかという、せいぜい芸州厳島までであつたようだ。

大阪又は金毘羅方面から戻ると京都に入る。京都からは帰路の旅

となるが、帰路も東海道ということは無く、琵琶湖畔の草津宿から中山道に入った。往路は海の景色を、帰路は山の風景を楽しんだわけである。

中山道を辿り、洗馬宿辺りから今度は信濃の善光寺へ向い、善光寺からは北国街道を通つて追分宿で中山道と合流する。これよりそれぞれ在所へ足を向ける訳であるが、日光を経て在所へ戻る場合も多くみられる。

以上は近世後期の旅日記をもとに見た東国人の伊勢参宮経路の基本パターンである。近世庶民のエネルギーは、幕府が二大軍事道路として設定した東海道・中山道を、旅の周遊コースに仕立て上げてしまったといえる。しかし近世人が常に既成の旅の経路で満足していたわけではない。新しい名所も右に述べた伊勢参宮ルートに取り込んでいた。地域旅行圏なども長途の伊勢参宮ルートに取り込まれていったと考えてよい。幕末期においては横浜や神戸が加わる。東国人にとつて長崎は余りにも遠い。しかしそこは異国情緒漂う地であつたことを知っている人々も多かったであろう。ところが幕末に至ると開港により、伊勢参宮ルートの中に横浜・神戸など、いうならば長崎に相当する地が入り込んでくるや、早速参宮ルートの中に組み入れられているのである。

以上近世の旅の概要を伊勢参宮ルートを中心に述べてきたが、以下川柳により近世の旅の実態をみることにしたい。ここで再度断つておくが、川柳の解釈には広範な知識が必要とされる。当然のことながら筆者にはそれ程の実力はない。本稿においては川柳の厳密な解釈を行うのではなく、総体的に川柳を通じて近世の旅を少しでも語ることができればと考えている。そうした意味から、参考のため

解釈不能の句も場合によつては掲載した。

## 二 川柳に見る旅

### (一) 旅立

- ① 菅笠て犬にも旅のいとまこい (初 8ウ)
- ② 乳の黒み夫トに見せて旅立タせ (初 16オ)
- ③ 能イむすめ年貢すまして旅へ立 (初 19オ)
- ④ 初旅へ晩ハ是じゃと二本出し (初 25ウ)
- ⑤ 旅立ハ式度めのさらば笠でする (二 23オ)
- ⑥ ならへ行人にくれく石の事 (三 16ウ)
- ⑦ 旅立ハはでなが早くくたびれる (五 8ウ)
- ⑧ 間男を知ツて旅立にへきらず (五 30ウ)
- ⑨ 子ハ寝せて置ケと断るかしま立 (七 21オ)
- ⑩ にくらしいきぬくを見る旅送り (七 21ウ)
- ⑪ まだ俗がおとなしいよと旅おくり (八 22ウ)
- ⑫ 石塔を見るゆへかたい旅おくり (一〇 21ウ)
- ⑬ 一日に十七人もたびへたち (一六 4オ)
- ⑭ とそきげん子のあいそうにたびへたち (一七 11オ)
- ⑮ しやうりやうと女房を留守に急ウな旅 (一九 13オ)
- ⑯ たひおくりはしより川が人かふへ (二一 5ウ)

徳川統一政権の成立により交通制度が充実し、交通施設も整備されたが、長途の旅は戦前の「洋行」以上のものであったろう。それゆえドラマは旅立の時から始まっている。

東国から関西への旅は一―二ヶ月程の日程を要する。いつもは邪

険にしていた犬にも①暫時惜別の情が移るであろう。尤松尾芭蕉の『おくのほそ道』<sup>(6)</sup>に

千じゆと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそく

とあるのは文学作品ということもあるが、少々大袈裟であろうか。そうかと思うと④のように、旅籠屋に着いたら早速飯盛女と同衾することを考えている連中もいる。②⑧のようにどうにも留守中の妻のことが心配では旅も楽しむことができないであろう。しかし旅をはじめて数日もすれば心配も吹き飛んでしまふかも知れぬ。旅立ということで旅の注意をしてくれる人もいる。⑥は奈良では鹿に石なぞ投げつけると罰せられるぞと注意をしている。

一方親しい人達が見送りに来てくれる。旅立つ前には餞別であるとか、地域によつては宗教的儀礼を行う所もあるが、旅立の日は双方共に一種の興奮状態といつてよい。興奮し過ぎて⑦のような状態になることもままあったであろう。

文政九(一八二六)年八月一〇日関西に旅立つ六所宮(現東京都府中市大国魂神社)神官猿渡盛章の様子を『山海日記』<sup>(7)</sup>にみてみよう。

今朝ハ空清うはれて、明はてんとする頃旅装と、のひぬ、人々大神に御かぐら奉り長途のつ、ミなからむるをこひねぎ奉るに、余も広前にぬかづきて、出たつうからやからをはじめ、親しき人々あまた送り来つれど、誰かをだにしるしと、めず、国分寺村かたを右に見て、恋がくほの里をも打過て、ふたつ塚という所の茶店にしばしやすらひ、こゝにて送り来し人々に別れぬ、

(中略)

ほどなく野老沢の町にやすらふ、したしき人々ハ猶こゝまでも送り来ぬれば、かたミに盃めぐらし、物くひなどして袖をわかつ時に、

今ハとてわかる、時ハひとと我もた、おだひにといふばかりなり

神官という立場もあるうが、かなり大勢の人々が送ってくれたようである。特に親しい人は遠方まで送ってくれたようで、途中の茶店で酒を汲み交している。

嘉永六（一八五三）年六月久留米藩士牟田高惇は全国武者修業に旅立ち、江戸滞在の後佐倉・水戸方面に向うが、この時も江戸の間達が旅送りをしている。嘉永七年四月一日のことである。<sup>(8)</sup>

一朝五ツ時京橋揃にして罷出候処、追懸<sup>ニ</sup>石川も出向<sup>ニ</sup>相成、木村久米、木村競、酒巻猶吉郎、其外六七人伊賀守様よりも出向<sup>ニ</sup>相成、御屋敷よりハ明善堂詰ハ不及申、原口寿左衛門<sup>并</sup>足輕共迄見送<sup>ニ</sup>相成、京橋前<sup>ニ</sup>右側<sup>ニ</sup>松田や立寄、又々離盃<sup>ニ</sup>相成、小子よりも少々肴等出候、石川伯父木村金吾と申人より、少饒別等<sup>ニ</sup>預也、昼八ツ時比、千住宿柏屋<sup>ニ</sup>止宿、両国互り迄伊賀様之人々送見<sup>ニ</sup>相成、尤浅草<sup>ニ</sup>下屋敷有之、其所より金吾より又々酒等出し、宝来<sup>ニ</sup>立寄也、

二度と逢えぬ人々もいるであろうから、勢旅送しも派手になってくるのだろう。しかしあちらで酒、こちらで酒の席が続き、朝の八時前後に京橋に集ったのはよいが、千住宿に到着は午後二時前後でここに宿泊している。これだけ酒を飲んで千住で泊らざるを得なかったであろう。

その千住宿に残されている明治四年の『旅日記』<sup>(9)</sup>によると、同

年四月二一日広田氏が伊勢参宮に旅立っている。

……大森山本屋にて中食、送りの人々と酒を催し、暫く休らひ夫  
 六郷川橋なし、川崎水茶屋にて送りの人々と分れ、夫<sup>(ママ)</sup>鉄銅  
 馬車にて横浜に着ス、

日記は千住に残されているが、広田氏は江戸の住人のようでもある。いづれにせよ川崎まで送るのであるから大変である。しかも酒漬けである。しかし大変というより、送る方はそれなりに十分楽しんでいようである。そうした状況を詠んだものが<sup>(10)</sup>であろう。同じ旅送りでもはし(板橋)より川(品川)の方が人が増えるというもので、これは板橋より品川の方が飯盛女の数も多く、洗練されていたためである。いってみれば旅送りは遊びのダシである。

旅といっても辛い旅もある。<sup>(3)</sup>は年貢を納入できない農民が、娘を奉公は身売りに出しその金で年貢を納めたことを詠んでいる。今日はいよいよ辛い旅立の日である。

様々な思いを込めて見送りの人々を振り返りつつ歩を進め、見送りの人々が遠ざかる頃二度目の別れを笠を振りつつ行うのであろう。

## (二) 道中・街道風景

- ① なげ入の干からびて居る間<sup>イ</sup>の宿 (初2ウ)
- ② 馬かたか居ぬと子供か芸をさせ (初5オ)
- ③ くわいらしい十里程来た立すかた (初8オ)
- ④ 道問へハ一度にうごく田植笠 (初18オ)
- ⑤ ひんぬいた大根で道をおしへられ (初18ウ)
- ⑥ 御伝馬て行<sup>ハ</sup>やたらに腹を立 (初26オ)
- ⑦ 追<sup>イ</sup>はぎにあふたもしるす旅日記 (二2ウ)

- ⑧ 能かける所で矢立ハ水をさし (二36オ)
- ⑨ 野雪隠地蔵しばらく刀番 (三63オ)
- ⑩ 道中で霜よけらしい駕に乗 (三6ウ)
- ⑪ ぬけ参り笠をばかぶるものにせず (三17ウ)
- ⑫ 馬かたのぶつ内垣をみなくらひ (三36ウ)
- ⑬ 馬士の名を呼ふのは通し馬と知れ (四35オ)
- ⑭ 知して居るものをかぞへるせんがく寺 (五18ウ)
- ⑮ 拾両の馬宿くへばつと知れ (七5オ)
- ⑯ 松の木へしはられて居る金飛脚 (七25ウ)
- ⑰ 田舎道こぼれたやうに家があり (八25オ)
- ⑱ 見物にむだ口の無<sup>イ</sup>せんがく寺 (九21ウ)
- ⑲ 宿く近く草履をはいた人に逢<sup>イ</sup> (一〇20オ)
- ⑳ ぬけ参り蔦に取つき登る也 (一一21オ)
- ㉑ ぬけ参りさくま町から跡につき (一二9ウ)
- ㉒ さゝみながら海へぶちこむさつだ坂 (一二13ウ)
- ㉓ ぬけ参り片道虎のゐせい也 (一二30ウ)
- ㉔ 気のどくさかいどう湯づけくふとむせ (一二37オ)
- ㉕ 七所<sup>コ</sup>を見い<sup>く</sup>渡る瀬田の橋 (一四37ウ)
- ㉖ 旅は道つれ大名とたるひろひ (一六16ウ)
- ㉗ ひだるかる馬にばくちを見せて置 (一七12ウ)
- ㉘ 舟ちんハ小遣ひ帳の初てに付 (一八41ウ)
- ㉙ はなれ馬さいをにぎっておっかける (一九24ウ)
- ㉚ 六郷をこへるとみへる江戸と京 (一九ス7オ)
- ㉛ 一ト宿ハおちこち人のとまるとこ (二〇11オ)
- ㉜ 旅馴<sup>レ</sup>たふりてせつちん先<sup>キ</sup>へ聞 (二〇37オ)

- ㉝ 川崎の品川と来るむす子旅 (二〇37ウ)
- ㉞ 夜<sup>ル</sup>ハなきひるハ旅人のしやまに成 (二一13ウ)
- ㉟ 旅だけに邪広にならないやうに折 (二一ス1ウ)
- ㊱ あん内者よめぬがくへはつれぬ也 (二二29オ)
- ㊲ じゃまな石夜<sup>ル</sup>ハひとりでかなしがり (二二30乙オ)
- ㊳ 江戸見<sup>ン</sup>物には雀が一<sup>チ</sup>羽付<sup>キ</sup> (二三25ウ)

旅の楽しみはその過程<sup>Ⅱ</sup>道中にあるといつてもよいだろう。歩く旅は通過する地の風土をじっくりと見聞することができる。交通機関の発達は目的地まで迅速に旅行者を運んでくれるものの、その過程は省略される。歩く旅は目的地の風土習慣が自分の育った地と比較してどのように異なっているのかを、道中を通して知ることができるといつてよい。歩く速度は人間の思考と歩を合わせているものであるうか。

しかし旅をして、または諸国の人々が江戸に集り方言ゆえにそれぞれ言葉が思うように通じず、

日本のどはをしつてはらをたて<sup>⑩</sup>

(拾遣七の2オ)

というようなこともあったであろう。

東海道を西に向う時数多くの名所・旧跡を見物しつつ旅をするわけだが、まず最初に立寄るといってよいのが泉岳寺である。当然泉岳寺が全国規模の観光地になったのは赤穂浪士討ち入り以降のことである。

⑭⑮はそうした光景を詠んだものであるが、赤穂浪士一件が忠臣蔵となり、近世を通じて現代に至るまで人々の記憶から消えること

のない原因の一つは、泉岳寺が東海道の出入口に位置することによる。それが芝居と相俟って長く人々に語り伝えられ、涙を誘うことになるわけである。これに対し忠臣蔵ほど全国規模になりきれなかったのが佐倉惣五郎といってよい。惣五郎は成田道沿いに祀られているが、ここは東国の人すべてが通る道筋ではない。関東・東北の特定地域の人々が通る道筋である。

さらに惣五郎に対する崇拜を佐倉藩が規制をしている。天保一四（一八四三）年六月佐倉藩は「宗吾塚」への道標の有無を調査させ、これを撤去させている。<sup>⑪</sup>

乍恐以書付御届奉申上候

一先達而中被仰渡候宗吾塚道印之儀、早々願主江戸上野広小路茗荷屋肥後、同堀江町壺丁目阿わ屋嘉蔵右両人方江掛合之上、右道印昨廿五日為取払申候、依之此段御届奉申上候、以上、

卯六月

③④は周知のごとく小夜の中山の夜泣石を詠んだものであり、名所旧跡も形なしではある。②⑤は近江八景である。瀬田の唐橋から八景を眺める様子を読んだものであるが、八景の一つ瀬田の夕照辺りからの眺望ゆえ七景となる。

観光地には観光を生計の資としている人々が沢山いるが、そのうちの業種の一つに観光案内業者がある。③⑥③⑧は観光案内業者を詠んだものである。

観光案内業者がいつ頃から発生したのかは定ではないが、近世後期には江戸・京・大阪・奈良をはじめ各地に存在していたようである。中でも奈良の観光案内業者は旅人に案内を強要するため、奈良奉行に案内業者の元締が呼び出しを受け叱責をうけている。<sup>⑫</sup> 多様

な人々を相手にする案内業者は恐らく相当に世馴れていたであろうが、この案内業者をまともに相手にした旅人がいる。土佐藩士安田氏は天保九年関西方面を巡り『大和巡日記』<sup>⑬</sup>を残しているが、彼は高野山内の案内人を雇い、案内人に難しい質問をしたり、逆に説明をしたりしていたらしい。雇われていた案内人は最後に、

私当年六十才に相成、先年より手引仕候へとも、あなた程六ヶ敷御尋の方には出合不申、十九才の時老人御座候処、其時分は私義も年若の事故、中程にて逃て帰り候、其後老人御座候、其外に無御座今度にて只三度也、と言ひて大笑也、

この案内人茶店ごとに雇い銭一〇〇文の外に茶碗酒を飲んだというから、結局安田氏に花を持たせつつ実を取ってしまったわけであるし、武家が一介の案内人を相手にするというのも大人気ない話である。

②⑫⑫②⑤は街道の馬方を詠んだものだが、どうも仕事の手が空くと直に博奕をはじめたようだ。

伊勢参宮の抜け参りも盛んに行われたが、奉公先などへ無断で旅立つため、たいした路銀も持ち合せていない。となると⑪のように笠は物乞の入れ物になるわけである。そうかと思うと公用旅行者も通る⑥。彼らは幕府の許可を得て馬を利用するため、威張りくさって旅をしている。富裕なものは馬を雇って旅をする。本来馬や人足は宿場ごとに交換するわけだが、通し馬は常に馬方も同じなため、名前を覚えてしまう<sup>⑬</sup>。

道中では多くのことを見聞するが、筆まめな人はこれを旅日記に記していく。それこそ中には⑥の追い剥ぎにあったことまで細大洩らさずに。やがて泊りの宿場が近づいてくると⑬草履を履いた人を

見かけるようになる。道中の足こしらは当然草鞋である。草履をはいている人は近場の住人という訳である。

道中は現代の言葉でいえば体験学習の場である。それも学ぶなどと肩肘張らず、無意識のうちに学べる場所であった。

### (三) 富士山

- ① 不二山か見へて傘みなかへり (九十四才)
- ② 不二を見なくしてちからのおちるたび (二二二才)
- ③ こそぐつてはやくうけとる遠目がね (初十五ウ)
- ④ 成程といって又見る遠めかね (十七才)

ここに富士山を独立させたのは東海道の象徴といってよいからである。富士山の見える地域の人間は扱置き、東海道を旅する人々の目的の一つは富士山を仰ぎ見ることと言っても過言ではあるまい。日本一の山、美しい山と聞いたり書物或は絵画で知っていても、日常これを見ることはできないわけである。

①は富士山が間近に見え、顔を上げ、被っている笠も上げ、旅人の一団が一斉に山を見上げた状況であろう。それ故富士山が見えなければ、②のように力の落ちる旅になってしまう。

旅日記にも富士山の眺望を記したものが数多くあるが『旅硯枕日記』によると、次のように記している。

南湖 小和田より壺里行、立場なり

この南湖入口より富士山右手ニ望眺、出口より左手ニ見る、又は忽然として正面ニあらわれ、誠ニ稀代の靈山いふも中々愚かなるへし、誠ニ天気快晴ニて十分の絶景たり、

さらに田子の浦・原・吉原間における富士山の眺望についても次のように述べている。

四海無双の名山にして、駿甲相三国に蟠ルといへとも、駿州富士郡にあれば富士山と号ス、今晚は空晴十分に見へしかと、惜かな曇天ニ相成、雲きりに覆ひかかりて、裾野浮島ヶ原而已見渡ス、此所富士山望眺正面也、

③④は富士山というわけではなく、遠目鏡ニ望遠鏡を覗きたいという思いを一般的に詠んだものであるが、この状況は旅でこそ見られるものかも知れぬ。『東海記行』<sup>(15)</sup>には、

沼ヨリ一里半  
中原 △右ノ万屋佐吉中休五兵衛駕下

但座敷北向キ不士山近シ妙々ナリ、当万屋座敷ヨリ望遠鏡ヲ以テ不士峰ヲ見ル、

(中略)

松新田 但當処ニテ不士山ヲ遠眼カ子ニテ見セル、街道の旅宿や茶店に望遠鏡を用意し、それを客に貸していたわけである。近世後期以降ともなると、望遠鏡は街道沿いの店にはかなり置いてあったようで、『神路山詣道中記』<sup>(16)</sup>にも東海道金谷宿で望遠鏡を覗いたとある。

一金谷江 壺り

此処ニ二月五日夕泊り、(中略)無間山遠目鏡ニ而見ル四文也(以下略)

近世初期に日本に入ってきたと思われる望遠鏡も、近世後期には茶店に備えられるまでになっていたのである。

冒頭富士山の見えない地域はと書いたが、富士山の見える江戸市民であっても、間近かに富士山の雄姿を見たいという願望は強かつ

たようだ。滝沢馬琴は享和二（一八〇二）年関西に遊んでいるが、往路富士山を見ることができず、帰路富士山が見えた時の喜びを次のように記している。<sup>17)</sup>

五月西遊の日、連日雨天にて、一日もこの山を見ず。八月帰路に到りて、駿州岩渕より原よし原のあひだに、終に全形の不二を見ざるをうらみとす。二十二日はこねを越ゆるの朝、一のやまのたひらより、さいの河原まで三里ばかりの間、不二を左に見て登る、この日快晴、只山腰に一帶の白雲ありて画ける如くしかり、山上に旭日映じて高興言外、暫時行客の足をとめたり。

旅における富士は、東海道を描いて富士山が描かれることと同様に、東海道の旅の最大目的の一つであり、強いては日本人の精神的な面にまで影響を与えたといつてよいだろう。

#### (四) 旅の留守

- ① 旅の留守ある夜内義のいだけ高 （三三ウ）
- ② 留守ねらうやつはあいつとあいつ也 （五四ウ）
- ③ 間男のふんどしをとく旅の留守 （五三ウ）
- ④ 間男をせぬを女房ハ恩にかけ （五四オ）
- ⑤ 旅の留守戸を引寄るにくらしさ （六四ウ）
- ⑥ 旅の留守内へもこまのはいがつき （ハ三オ）
- ⑦ 旅のるす何をしよふとまゝな事 （十ウ）
- ⑧ いとこにもしろよふくると旅の留守 （一二二六ウ）
- ⑨ まおとこの外に留守中別義なし （一四三オ）
- ⑩ いせの留守女房あこぎな事をする （一四二五オ）
- ⑪ 参宮の留守のもふけハ男の子 （一五三八オ）

- ⑫ 来る人か日和をはめる旅見舞 （一七三四ウ）
- ⑬ 心ほそそうなたちかと伊せの留守 （一七三七ウ）

句の内容からまた当時の社会的環境から留守は女性つまり妻となる。庶民の旅の留守宅状況をともに記したものなど無い。それこそそれは川柳の世界である。間男を気にしつつ旅に立った人には読まずことのできぬ句が並んでいる。

妻が一人で留守宅を守っていると知ると、①②⑤⑬のようにちよつかいを出そうという馬鹿な男から我身を守らなければならぬ。そうすれば④のように亭主へ大きな口も聞けようというもの。しかし③⑥⑧⑨⑩となつては最早致し方ないし、⑦は手の打ちようもない。

#### (五) 宿場・旅籠屋

- ① 定宿を名乗てひといい場をのがれ （初七オ）
- ② 出女の鏡へうつる馬の面ヲ （初三六ウ）
- ③ 宿引ハあたまた数程下ケて来る （三二一ウ）
- ④ 出女のかいこんで行やなぎごり （三二三オ）
- ⑤ 留女片袖もつてわびて居る （三二九オ）
- ⑥ 馬喰町きうじの手でもにぎらせず （五二ウ）
- ⑦ 名物の内だと御油ですゝめこみ （五三四オ）
- ⑧ めしもりにくらしいたと遣り手いひ （七一〇オ）
- ⑨ 旅がこうしやではいい水の宿をかり （七一九ウ）
- ⑩ べんせつをふるつて宿ハ五両とり （七二二オ）
- ⑪ 女房の縁で御油なども上ケ （ハ一九ウ）

- ⑫ 一ト宿は宿引の出ぬふとゞきさ (一六14オ)
- ⑬ 宿帳をつけると山のきやくはなし (一六22オ)
- ⑭ めしもりかと見れハにしきの夜具也 (一六29ウ)
- ⑮ 宿引八万歳ほどのはしらだて (二二23ウ)

宿泊客が到着する頃になるとこの旅籠屋も宿泊客争奪の戦いが始まる。客引は留女である。彼女達は一人でも多くの客をと入念に化粧をする。その鏡に②のごとく馬の顔が写ることもあっただろう。③④⑤はいずれも客引の様子を詠んだもので、④は抱え込んだ客の柳行李の振り分け荷物を離すまいとしている。力のあまり⑤のように客の袖をひきちぎってしまう。

これに対抗するため客は定宿を名乗ってその場を逃れ、何とか納得できる旅籠屋に泊る。宿泊施設の形態には木賃宿・旅籠・飯盛旅籠があつたが、飯盛旅籠宿泊者は飯盛女を押し付けられたり自分から呼んだりする。

⑦は御油宿の飯盛女を詠んだものだが、御油宿と次宿赤坂宿は至近距離にあり、旅客の争奪戦は激しかったらしい。例えば安藤広重の版画『東海道五十三次』の御油宿を見ると、題名は「旅人留女」とあり、二人の旅人が留女に荷物と袖をしっかりと握られている。一方赤坂宿は「旅舎招婦図」とあり、旅籠屋内部を描き、右手の部屋では飯盛女とみられる二人の女性が化粧をしている。

本稿では紙数の関係から触れられないが、飯盛女を含めて具体的宿場名が最も多く川柳に現れるのは品川宿で、これに次ぐのが中山道軽井沢宿であろう。しかし品川宿の場合旅人に焦点をあてた句は少なく、江戸市民が品川に遊びに来た様子を詠んだ句が多い。これ

に対し軽井沢宿は周辺に大都市が無かったため、農間余業のほとんどは旅に関連したものである。これは言うまでもなく軽井沢宿は山の宿であり、旅行・運輸により収入を得る必要があつたためである。

## (六) 関所

- ① 中川ハ同じあいさつして通し (初13ウ)
- ② 蠅打てかき寄て取ル関手形 (初34ウ)
- ③ 関守の声を越るとまねて行 (初41ウ)
- ④ 関守もとかれた所<sup>コ</sup>てすねを出し (二16オ)
- ⑤ すつほんの首を関守見て通し (三7ウ)
- ⑥ ぬけ参<sup>リ</sup>鎖さすまたの中て出し (四20オ)
- ⑦ 関守の目き、のとりめかけ也 (四30ウ)
- ⑧ 新関は目くちかわきな人斗 (四52オ)
- ⑨ 関守<sup>リ</sup>がわらつたといふぬけ参<sup>リ</sup> (五17オ)
- ⑩ さね盛の切ッ手で通す仏が荷 (五25オ)
- ⑪ 関守の折ふし通ふかるい沢 (六14オ)
- ⑫ 関守ハ手形とほくら見くらべる (六15ウ)
- ⑬ 三味せんをにきつて通る船番所 (一一24オ)
- ⑭ 御番所をこすとひき出す今のあと (一四26ウ)
- ⑮ まくるだと女をおどす関所まへ (二〇19オ)
- ⑯ くれおそき関はのびたりちぐんだり (二〇25ウ)
- ⑰ 関所前女をなぶりく<sup>キ</sup>行 (二二四オ)
- ⑱ 四郎兵へが関所やふり<sup>ハ</sup>高がしれ (二三39ウ)
- ⑲ 関守ハ二度夜か明て大さわき (二四16ウ)

旅の面白さは道中にあるといつても様々な障害も待ちうけている。その一つが関所である。⑤⑥⑦⑧⑨⑫⑬⑭⑮⑯は女性の通関に關係した句である。⑥は関所の武具の並ぶ中で男であることを証明するために一物を出した情景であり、⑨はそれを見て関守が笑っている。實際そのようなことがあつたとは考えられないが、女性の通関には手形の取得から場合によつては取調が面倒であつたため、前掲の⑤⑬⑰のような句が詠まれるようになったものであろう。

⑦は関守がいかに人を見る目があるかということだが、関守特に箱根関所や新居関所の場合、日本で一―二を争う程多くの、しかも各地の人間の顔を見たといえるだろう。一定の書類さえ持参すれば関所は通過できるわけであるが、矢張り無事通過するまでは緊張をする。そこで無事通過すると③や⑭のような句が出来る。

①⑬は江戸と下総の行徳を結ぶ河川沿に設けられた中川関所を詠んでいる。中川番所は人と荷を改めたが、旅客は成田参詣に行く場合が多く、船中唄ったり酒を飲みながら行く場合もあつた。そこで中川番所が近づくと三味線をやめ、隠すように握っている。関守は不審が無ければ「通れ」と言い、船頭は「通ります」と答える。そのやりとりを詠んでいるのが①である。

# (七) 川 留

- ① 川止<sup>メ</sup>の間太夫も麦をつき (初19ウ)
- ② 金谷から臼ひき唄を覚えて来 (初28ウ)
- ③ 嶋田にも金谷にも武者五六千 (三36オ)
- ④ 川どめに碁ばんの外ハつぽをかり (四9オ)
- ⑤ 川留に宿の小僧が跡を追ひ (五11ウ)

- ⑥ かいつくらとても嶋田は川づかへ (七20ウ)
- ⑦ 川どめに手にはを直す旅日記 (ハ18ウ)
- ⑧ 嶋田より金谷のほうの御氣がせき (九25ウ)
- ⑨ 川留にむけんの鐘へさそわれる (二〇35ウ)
- ⑩ 川留とおぬけなんしと女郎いふ (二一39オ)
- ⑪ 川留にこりけふも山く (二一40ウ)
- ⑫ あげつめのうち川どめに嶋田あひ (二二6オ)
- ⑬ 嶋田て出したこのかたとごばん出シ (二六8ウ)
- ⑭ のりものを戸たなに遣ふ川つかへ (二七4ウ)
- ⑮ 水の無<sup>イ</sup>川とめ江戸の出ぐちなり (二九2ウ)
- ⑯ こしやうきてくらすはかたい川つかへ (二〇35ウ)
- ⑰ 川留にこり棧道を通る也 (二〇37ウ)
- ⑱ のふいんハ川どめなどのうそをつき (二二6ウ)
- ⑲ たいくつなもんだとかたい川づかへ (二二10オ)
- ⑳ しまだよりかなやか先<sup>キ</sup>へ請<sup>ケ</sup>いだし (二二40ウ)
- ㉑ 退屈さ川を越す夢斗<sup>リ</sup>見る (二三40オ)
- ㉒ 百とると首か無<sup>イ</sup>から川を留<sup>メ</sup> (二四15ウ)

川を渡るにしても橋であれば楽である。橋が無ければ船か人に頼る、又は自分で渡ることになる。いずれにせよ旅人にとって大きな障害の一つである。無事渡河できればよいが、増水により川留となれば何日も旅籠屋に逗留を余儀なくされ、費用もかさんでくることになる。

川留の句の大半はあきらめの境地で暇をもて余している句である。そのため河川の渡河を嫌う旅人は⑪⑰のごとく中山道を通ることになる。

川留は狭い地域に大勢の人間が閉じ込められるため、異常な雰囲気  
 気が人心を支配することもあり、時に争いごともある。慶応元（一  
 八六五）年閏五月江戸から東海道を上り近江に帰る錦織氏は富士川  
 で川留に相遇している。時期も悪かったが吉原宿に五日間逗留して  
 おり、この時次のような事件が発生している。<sup>18</sup>

亦四日午後当宿内御旅館ナル八木但馬守殿下部ノ中争論アリテ、  
 二三人手キズ忸人打殺スト云、

本稿では省略するが渡船については渡守を含めて多くの川柳が作  
 られている。これらの句は必ずしも旅を意識したものではないが、  
 船中が一つの世界を創出しているといえる。次にいくつかの句を列  
 挙しておこう。

舟嫌ひ忸人リハ川のへりを行 （初34才）

船頭も跡のば、アハ義理で抱キ （五4才）

渡し守一トさは戻す知った人 （五20才）

わたし舟戸板しよつて、しかられる （一六15才）

船が特異な世界を創り出すのは、限られた箱の中ということもあるが、水に対する恐れが大きかったであろう。現在でこそ多くの人は泳ぐことができるが、近世においては一部庶民を除いて水泳は縁の無いものであり、泳ぐ機会などはなかった。水泳は武術の一つであったわけで、まして婦女子が泳ぐことなど海女を除けば想像外の世界であつたろう。水に関する禁忌や河童の伝承成立などもこうした水に対する恐怖も大きく影響しているのだらう。

## Ⅷ 旅迎え

- ① 旅むかいすやをした日の面白さ （五5才）

- ② 下向にはあばたで戻るぬけ参リ （五15才）  
 ③ 御内儀をなぐさんで出る旅むかひ （五22才）  
 ④ 板ばしと聞イてむかひハ二人リへり （五39才）  
 ⑤ 旅むかい遠見を出して揚て居る （六1才）  
 ⑥ 旅むかい夜ぎりはらつて出事ハの （六13才）  
 ⑦ 旅むかいたいこ四五通持ッて来ル （七31才）  
 ⑧ 川はたにつつ立あかる旅むかい （一〇9才）  
 ⑨ 旅むかいまじめな顔で扱待った （二〇15才）  
 ⑩ たびむかひこうしてゐるハそんだハな （一四23才）  
 ⑪ 旅むかい五十里先キのあくびする （一九15才）

長途の旅も故郷が近づくといふ頃我家に到着するかを飛脚に託す。  
 長旅のため出発時は子供であつたのに、帰りは②のように顔中にき  
 びだらけ。

旅迎えも旅送り同様旅に行かなかった人も旅の興奮を味わうこと  
 ができ、ついでに飲み食い、場合によっては遊女屋に揚り込んでし  
 まう。遊ぶにしても主役一行が到着しなければ氣勢は上がらない。  
 そこで⑤⑧⑪のようになるが⑤の場合主役到着前に遊び始めている。  
 どうせ旅迎のついでに遊ぶのであれば品川が一番となり、④のよう  
 に迎えの人が減ってしまうことも。

旅に出た人も出ない人も楽しさを共有できるのが旅送りと旅迎え  
 であつた。

## Ⅸ 旅帰り

- ① 足洗ふ湯も水に成ル旅戻リ （初4才）

- ② 旅戻<sup>リ</sup>子をさし上<sup>ケ</sup>て隣まで (初35ウ)
- ③ 品川へ来てなが<sup>／＼</sup>の口なをし (三37ウ)
- ④ とほ口へ見物のある旅かえり (四14オ)
- ⑤ 旅かへり五けんのぞいて内へ来る (四22オ)
- ⑥ あくる晩女房を呵る旅づかれ (四29オ)
- ⑦ 旅帰<sup>リ</sup>大きなはらのまゝで去<sup>リ</sup> (五19オ)
- ⑧ 旅かへり品川からはいんぎんこ (八5ウ)
- ⑨ 川留をわらじではなす旅もとり (九15オ)
- ⑩ 品川に居るにかけせん三日すへ (九27ウ)
- ⑪ 旅戻<sup>リ</sup>乳母ハから手てかけて来<sup>ル</sup> (九33オ)
- ⑫ 旅かへり女房につきやかましさ (一〇25オ)
- ⑬ 我内へ先こしかける旅かへり (一一14オ)
- ⑭ は、あきやつめだとかんづく旅かへり (一二11ウ)
- ⑮ 旅かえり女房三みせんかくす也 (一四25ウ)
- ⑯ 旅かえりふきげんな貞気にかゝり (一五5ウ)
- ⑰ 旅もとり子ともが先<sup>キ</sup>へふれて来る (二一3オ)
- ⑱ たびもどりのいしゆざしをする出来ぬやつ (二一ス8オ)

旅Ⅱ異次元を歩いて来た旅人が日常の世界に帰ってくる。否、体が異次元に慣れきつてしまうと日常が異次元に映じ、そこに新たなものを見い出すのかもしれない。それは一方では上に対する批判のガス抜き装置として作用したわけである。尤旅に出てより政治への批判の目を養うこともあるが。

我家も近い、可愛い子を旅に出したとなれば⑪のように母親よりも乳母が飛んで迎えに出る。子供がいれば子供が隣近所に触れ歩く

⑰。その子を抱き上げて隣まで挨拶に出向き②留守中の札を言う。家に上るのもどかしく旅の話を始めるため、足を洗う湯も水となり①、④のように入口には見物人が集ってくる。旅中最も大変な川留の話などを⑨。そうかと思うと早く帰ればよいものを品川の遊廓に入りびたっている連中もいる③⑩。当然帰りの足取りは⑧になろうというものである。

暫く振りに亭主が帰ったとなれば、間男のいない妻は⑥の仕儀に及ぶが亭主は疲れている。しかしこれは幸せな姿である。これに対し⑮や旅迎えの⑨となると少々心配となり、挙句の果は⑦では何で旅に出たのかという気分になってしまう。

## まとめ

旅は近世庶民にとって最大の楽しみであった。多くの人々が旅に憧れ旅に出た。中でも伊勢参宮は旅の総決算的意味を持っていた。旅に対する憧れにつき、橘南谿の『東遊記』<sup>⑱</sup>の一文を引用し、まとめしよう。

### 駿河名

奥州南部の地は、日本東北の極ゆるゑ、殊に野鄙なり、然れども其人甚質朴にして、又甚神仏を信ず、就中伊勢大神宮を深く信じ、いかなる貧しきものも、男女とも参宮せざる者なし、余盛岡近所にて馬に乘しに、其馬かたの物語に、我祖父代々駿河と名附といふ、余も驚きて、馬かた杯をする身の父の、いかなればかゝる国名を名乗る事ぞ、御身の父祖はいかなる家筋の人にやと問ひしに、馬かた答へて、此名には深き由来こそ侍れ、某が祖父参宮せしと

き、道すがら諸国の景色風土を見及びけるに、其中に駿河国程よきはなしと思ひけるが、歸りての後も猶彼国ゆかく覚えけるまゝ、みづからの名を駿河と附て、一生を終ぬ、我父も亦、其父の名なれば、同じく駿河と名乗りぬ、某も又、駿河と名乗べきを、在所の庄屋あまり大なる名なりとて、いなみけるまゝ、某ばかり又助と申なりといへり、

長文の引用ではあるが、旅への思い、旅の素晴しさを余すところなく表現している。

川柳を素材として近世の旅について考察を試みたが、筆者の怠慢と紙数の関係から他の旅関係の川柳を収録分析することができなかった。さらに川柳の性格上なかなか論文としての体裁をとれない箇所があったことをお断りしておく。

今後さらに川柳を歴史史料とし扱っていきたいと考えているが、本稿はそのための一試論として受け止めていただければ幸である。

## 注

- (1) 岡田甫著『川柳東海道』上下(昭47・48) 読売新聞社
- (2) 安藤幻快坊編岡田甫『川柳大山みやげ』(昭32) 有光書房
- (3) 山沢英雄校訂『誹風柳多留』全五冊(昭37) 岩波書店
- (4) 拙稿「旅日記にみる近世の旅について」(『交通史研究13』)
- (5) 拙稿『房総の道成田街道』(昭62) 聚海書林
- (6) 杉浦正一郎外校注『芭蕉文集』(昭34)(『日本古典文学大系46』) 岩波書店
- (7) 府中市立郷土館編『猿渡盛章紀行文集』(昭55) 同教育委員会
- (8) 『諸国廻歴日録』(昭54)(『随筆百花苑』13) 中央公論社

- (9) 東京都足立区千住横山家文書
- (10) 山沢英雄校注『誹風柳多留拾遺』(昭55) 岩波書店
- (11) 成田市史編さん委員会編『成田市史』近世編史料集五上門前町I(昭51) 成田市
- (12) 大久保信治著「江戸時代奈良の旅籠屋仲間の問題」(『ビブリア74』)
- (13) 『日本庶民生活史料集成』二(昭44) 三三書房所収
- (14) 平山敏治郎校訂『民俗学研究紀要7』成城大学民俗学研究所収
- (15) 『日本都市生活史料集成』八(昭52) 学習研究社所収
- (16) 阿久津満校注『神路山詣道中記』(平3) 随想社
- (17) 滝沢馬琴「壬戌騎旅漫録」(大4)(『有朋堂文庫・日記紀行集全』) 有朋堂
- (18) 注15に同じ
- (19) 今泉忠義校註『東遊記』(昭14) 改造社